

明治末年の沖縄をめぐる文学の一側面

——伊波月城による山城正忠「九年母」批判の視座から

One side literature around Okinawa of the Meiji era latter period

From point of view of the criticism to Seichu Yamashiro "Kunibu" by Getsujo Iha

柳井貴士 (Yanai TAKASHI)

キーワード：伊波月城／明治末年沖縄の文学／山城正忠「九年母」

一、はじめに

伊波月城（本名・普成）は「沖縄学の父」といわれる伊波普猷の弟である。月城は一九〇九年（明治四二）に「誓閑寺時代の回顧」を記し『沖縄毎日新聞』^①での本格的な執筆活動を開始する。比屋根照夫は月城について「個人主義的・世界主義的志向の強い人間であり、宗教的倫理にもとづく内発的・内省的な人間」^②と評価しており、また仲程昌徳には月城の言論活動全体への考察がある^③。

比屋根照夫によると、月城は「一八八〇年（明治一三）二月二七日、父普濟、母マツルの二男として那覇西村に誕生した。廃藩置県後一年、いまだこの社会変革の激動がおさまらない、不安な世相のなかで」^④出生している。所謂琉球処分断行（一八七九年）の頃、沖縄では琉球王国復活のために清国に繋がる頑固党と、日本帰属を受け入れる開化党が対立していたが、一八九四年（明治二七）の日清戦争における日本の勝利により、頑固党の活動も収束していった。

月城の兄伊波物外普猷は、沖縄県尋常中学校入学後、校長児玉喜八の英語科廃止への不満と、一九八五年（明治二八）の恩師田島利三郎らの解任に抗議し全学的な決起を先導し退学となった^⑤。月城はこのストライキ事件^⑥に下級生として参加するも、学友と共に許され、学校に残り一八九九年に卒業した。月城は青山学院大学に一九〇〇年頃入学しており、外国人教師チャペルに英語詩を学んでいる。卒業年月は不明だが、その間、現在の早稲田駅付近にある「誓閑寺」で寄宿生活を送り、一九〇六年頃に帰郷した。比屋根照夫は、帰郷後、兄と共に「沖縄基督教青年会」や「球陽文芸会」を結成したことを伝え、「月城が創刊間もない『沖縄毎日新聞』（一九〇八年創刊）に記者として入社し、言論ジャーナリストとして本格的なスタートをきるのは、一九〇九年（明治四二）三月、二九歳」^⑦だと指摘する。

月城は、東京留学時代から二〇年して「新聞を起して見やうといふ」^⑧「小理想は漸く実現せられ」たと述べる。仲程昌徳は「新派」琉歌の

作者として登場し、美以教会を抛り所にして英文聖書等の講師となり、そして翻訳者として外国文学の紹介をし⁹⁾ながら、月城の飛躍を一九〇九年(明治四二)に見出し¹⁰⁾ている。いわば〈小理想〉から〈大理想〉へと月城の〈思想〉は拡張していくのである。月城の評論の特徴は、社会時事問題に言及しつつ、外国文学から摂取した〈思想〉を展開するところにある。その中で月城は沖繩における〈文芸復興〉を希求し続けていく。

そして入社から二年後の一九一一年、中央文壇において沖繩出身の作家の小説が掲載された。山城正忠「九年母」である。だが月城は本作に否定的であった。同時代評、先行研究ではこの月城の批判内容への言及は管見の限りみられない。そこで本論では、月城の〈思想〉の大枠をふまえながら、「九年母」批判への経緯と内容の考察を目的とし、分析をすすめたい。

二、伊波月城の出発と展開

月城の言論にはいくつかの特徴がある。ここでは月城の「九年母」批判に関わる点を確認する。

月城は、その思想の多くを共有しているといえる。日清戦争を経て日露戦争の後、沖繩の視線は、中国との親密な関係から日本化への段階を経て、「他府県」との関係の在り方に移行していた。鹿野政直は普猷の活動の特徴に「講演活動」を挙げている¹¹⁾。普猷の一九〇六年(明治三九)の講演に先がけて、『琉球新報』は、「伊波文学士の琉球史講演は本島の発達に貢献する」とし、「依然歴史なき県民」である沖繩の

少年の覚醒を期待する宣伝を掲載している¹²⁾。さらに講演後には「嘗て学校の教科書中より沖繩県史を取去りにして県民を死牛、木馬の後裔たらしめんとしたる為政治家の愚拳」¹³⁾、「歴史埶滅策」をほおむり、「将来に於ける県民の自覚を喚起する」ものとして歓迎された¹⁴⁾。普猷は沖繩の立つ場所を、受動的な歴史観の中に見出さない。それは一九〇九年(明治四二)に、前沖繩県属滝口文夫の「沖繩人は帝国民と智育に於て劣等なり」¹⁵⁾の発言を受けて展開された論争における「国家主義」への批判とも関連する。普猷は「個人に固着せる根本思想は無雙絶倫」だとし、「沖繩人微りせば到底発現することの出来ない所」の重要性を説いて、「或一部の人々が持つてゐる特質のみを保存してそれに異なつたものは片端から無く」すような排他的行為を批判している¹⁶⁾。この普猷の言説は、月城により「伊波文学士の談」として筆記されたもので、沖繩の「無雙絶倫」(ユニークネス)の出現、排他的国家主義への批判は、月城に確実に共有されているのである。「無雙絶倫」は普猷が沖繩を考へる際に拘泥した問題であり、普猷『古琉球』¹⁷⁾の第二論文「琉球史の趨勢」でも、「無雙絶倫」とは「他人の到底占め得べからざる位置を有」(本文圈点)すものとしている¹⁸⁾。

月城は一九〇九年(明治四二)四月一六日「嶽色潮声」に次のように主張する。

琉球固有のものはすつかりぶちころさなくてはならないといふ浅薄なる国家主義の爲めに一時大打撃を蒙つてゐた琉球文芸は今春になつて復活して、来る十八日には三十六島の詩人等が奥山公園

に集つて連合琉歌大会なるものを開催することになつゝある之れ実に琉球民族が各自の立脚地を知つて精神的に復活した証拠（…）

一九〇九年を「琉球固有のものはずつかりぶちころさなくてはならないといふ浅薄なる国家主義」から脱した「文芸復興の第一年」とした背景には、一九〇八年、「琉球王」と称された第四代県知事奈良原繁から日比重明に代わり、一九〇九年には間接選挙による県会が発足するといった社会的動向があるだろう。またここで月城は「浅薄な国家主義」の網の目に抵抗し、主体的に立ち現われる沖繩を、「琉球文芸」としての「連合琉歌大会」に見出そうとしている。

さらに、月城が希求した「文学」の根底に〈革命的〉要素を見出すこともできる。四月二〇日「英の文豪逝く」として訃報が伝えられた、ギリシヤ風詩劇「カリドンのアタランタ」などで知られるスウィンバーンについて、翌二一日「嶽色潮声」で月城は次のように言及する¹⁹。

マコーレーがフレデリック大王伝に「詩歌は野蛮時代の産物で文明になるに随つて詩歌は衰微す」といふやうなことを云ふてゐるが豈はからんやマコーレーの死後に彼の国にスキンバンのやうな詩人が出現したのはマコーレーの言の当つてゐないのを証拠立てると同時に詩歌は科学万能の時代にも衰へないといふことがわかる。

詩歌の扱う言葉や形式の普遍性を支持しながら、続けて「彼はひと

り詩歌の革命者のみならずあらゆる事物にかけて革命者である宗教といはず道徳といはず又帝王といはずありとあらゆる習慣規憲を無視して自分で自分の道を開拓した」と述べている。月城はスウィンバーンの詩歌やその姿勢に〈革命者〉たるものを見出し〈革命的〉であることを賞賛している。

それは二葉亭四迷の死の報にふれた際の評論とも通底する。月城は「彼の胸には絶えず革命思想が漲つてゐた旧時代と新時代保守主義と進歩主義とが盛に戦つてゐる現代日本の思想界には実に二葉亭の如き革命的詩人を要する」とし、その死を悼む理由は四迷が「革命的思想家であつたから」²⁰だと述べる。これは「外来思想を排斥しやうとする現代日本の鎖国的攘夷論」への抵抗の示唆であり、〈革命的〉であることの必要性が月城の〈思想〉を特徴づけている。

同時に、外国文学の受容者である点がここからうかがえる。月城は『沖繩毎日新聞』を中心にモウパッサンやハウプトマンの翻訳を行い、スタンダール、ホイットマン等に関する評論を書いている²¹。例えば月城は文化文芸の重要についてシェイクスピアを用い「英国をして今日あらしめたのは印度帝国の富でもなくテムズ河畔に浮かべる世界最強の艦体のみでもなく実に、詩王シエキスピヤの御陰」であり、そこから「趣味の涵養」を説く²²。〈武力〉よりも〈趣味〉や〈文芸〉を強調する姿勢は、さらに〈革命的〉であることと呼応し、月城の〈思想〉の中核を形成していくのである。

『沖繩毎日新聞』一九〇九年一〇月一九日「葉書一括」欄において、月城は「詩ならばバイロン卿やワーズワースの作物」としバイロンを

挙げる。一九〇六年（明治三九）八月一日付『琉球新報』には捨小船なる人物が友人の議論に口を挟んで、「折衷せよ」と思つてアナクオン

やバイロンを説いたらそれぢや君はバイロン主義かと云はれて閉口した」と記している。矢野峰人は、透谷『楚囚之詩』とバイロン『シロンの囚人』との関連から、明治二二年を「バイロン移入史上、特筆すべき年」⁽²³⁾とし、「バイロンの翻訳が盛に出たのは三十年代の後半に入つてからの事」⁽²⁴⁾だと指摘する。明治二〇年代から三〇年代にかけて、バイロンが中央文壇において意識され、沖繩はその射程圏内に少なくとも一九〇六年には入つていたことが理解できる。月城のバイロンへの言及は四月一六日「嶽色潮色」にもみられる。菊池有希は『文學界』同人とバイロンの関係について「バイロン熱の内実の最大公約数は、『繩墨打破』の恋愛詩人」⁽²⁶⁾への共感だと指摘し、日清戦争により前景化される国家ナショナルリズムとしての「繩墨」をいかに「打破」したかという問題を問うている。月城は日清戦争や日露戦争下の環境を経ながら、帝国主義的膨張と故郷沖繩における伝統や文化の根絶を見ていた。因習的に従属的な県民の「目醒め」、つまり「醒めたる青年」⁽²⁷⁾の登場が期待されたのである。月城が外国文学受容において見出していったのは従属的に状況を受け入れる不問化された主体への批判の方法であり、無批判的に「国家」と統一化されていく身体や「思想」への危惧であった。

後述するように、正忠「九年母」は時代背景を日清戦争下の沖繩にとり、そこでの従属的な県民の姿勢を描いていた。「浅薄な国家主義」の網の目に抵抗しうる主体的な沖繩を問う「文学」を月城は希求して

いた。いま結論を急ぐなら、正忠「九年母」にその点を見出すことは月城にはできなかつたのである。

三、山城正忠「九年母」の特徴

山城正忠は、一八八四年（明治一七）に那覇で生まれ、上京後、与謝野鉄幹、晶子に師事し『明星』誌上に短歌を発表している。一九一〇年（明治四三）九月の『沖繩毎日新聞』に「与謝野氏門弟中に於て将来有望の青年作家」として紹介され、五七調和歌を創作した。⁽²⁸⁾「九年母」は『ホトトギス』一九一一年六月号（二〇〜三二頁）に掲載された短編小説である。日清戦争の頃的那覇を舞台にとり、開化党（開明派）と頑固党（旧守派）との対立で混乱する社会状況を背景に、少年（政一）を視点人物として彼の周囲で起こる出来事を描いている。

琉球文学研究の池宮正治は正忠について「一九一一年（明治四四）には『アララギ』に、頑固党と開明派の葛藤を描いた戯曲「九年母」を発表している」と指摘するが、『アララギ』は『ホトトギス』、戯曲は散文小説の間違いで、内容も「頑固党と開明派の葛藤を描いた」⁽²⁹⁾だけでは決してない。岡本恵徳は明治期に「少年の視点で描き、新しい時代に対応しえないでいる守旧派の悲喜劇を描いたものであった」と⁽³⁰⁾内容を説明する。これは先の池宮の見立てより踏み込んだもので、物語における少年の存在にふれている。

初出誌掲載「九年母」にはタイトル等に振り仮名はないが、一二頁の母と「政一」の会話で「クニアがうれたら〔…〕と表現されている。

「九年母」の同時代評には「殊に南国の色彩が割合にクツキリあらは

れてゐる」⁽³²⁾、「琉球の色も濃く出てゐる。(中略)色彩豊かな作品である」⁽³³⁾、「この人位色彩——原色の——を使ふ人はあまりない」⁽³⁴⁾など〈色彩〉への言及や、「矢張事件の描写よりも琉球の自然を書いた所がよかつた」、「事件の描写よりも却つて自然の描写が一種のローカル、カラーを出すに都合よかつた」といつた〈ローカル・カラー〉への指摘がある⁽³⁵⁾。いま月城がこれら評価を読んでいたのかは不明だが、〈ローカル・カラー〉や会話の問題を、その批評に上げている点は指摘できる⁽³⁶⁾。

確かにテクストには「真ツ白な貝がら」「赤蟹の甲」「黄いろな芭蕉の帷衣が藍縞の単衣」などと記されているが、実際物語は、暴風雨によつて静かに沈黙した破壊後の様子から始まっている。「をそろしく荒れた暴風雨はや」みはしたが、「深い谷底のやうに沈ん」だ海岸、「海に近い、さびしい南国」の木々は「琉球特有の潮風にふきからされ」ている。「南国の色彩」との評と、ここでの描写は齟齬をきたしているし、舞台を南国にとつてゐるからといつて、地方色＝風土を描き出す作品とはいえない。

〈ローカル・カラー〉は明治文学における重要項目のひとつであり、月城もまた、「南国の色彩」や〈ローカル・カラー〉を媒介にした作品の登場を希求していた。木村毅は「ローカル・カラー」という言葉を日本で初めて用いた批評家は森鷗外であろう⁽³⁷⁾と指摘している。鷗外は一葉「たけくらべ」について「復た大音寺前なしともいふべきまで、彼地の「ロカアル、コロリツト」を描写して何の窘迫せる筆痕をも止めざる⁽³⁸⁾」と述べている。〈ローカル・カラー〉を主題的に取り入れた作家に田山花袋がいる。花袋は『小説作法』⁽³⁹⁾所収「ローカル、カラー」

において、「真に迫るといふ立場から言ふと、ローカル、カラーは実に重要」であり、「本当の人物、本当の時代を書かうとするには何うしても、このローカルといふものを捨てゝはなら」ないという小説論を展開するのである。

自然主義の代表作『破戒』や『蒲団』はすでに刊行されているが、月城は所謂自然主義を受けて、「社会が腐敗墮落して居るが故にその反影たる小説も淫靡になりてこれを読む熱血が渾身に漲つてゐる盲なる青春の徒の訓練せられざる野生のまゝなる感情を激動せしめ彼等をして沈淪の路に到らしむるのである」⁽⁴⁰⁾と述べている。自然主義の淫靡性のみ持ち上げ評する同時代の沖繩論壇に対して、社会批判を展開していくのである。

月城は、昇曙夢が『沖繩毎日新聞』への書信で示した「今の灰色がかつた我が文壇に何うかして御国風のローカル、カラーを見せてやりたい」⁽⁴¹⁾という言説への呼応だけにとどまらず、〈社会改変〉の契機としての「文学」を照準としていたふしがある。月城は〈ローカル・カラー〉という概念を受けて次のように続ける⁽⁴²⁾。

然し文学は神聖である単に観光客を吸収する為めに詩筆を奮ふ可きではないが吾人は祖国を世界に紹介する為めにあくまでもローカルカラーを發揮している作品が出現せんことを希望してやまないのである

だが、月城にとつて「九年母」は「ローカルカラーを發揮している

作品」とはいえなかった。月城は「九年母」評の冒頭、「沖繩人にして文学研究者又は行末作家たらんとする青年に芸術家たらんとする沖繩人は如何なる道を踏む可きかを示したいと思ふ」と述べ、「九年母」には不在の「如何なる道」を示す。

山城君の作は他府県の人にはさぞ面白いかも知れないが吾等琉球の文学の研究より出発して来た文学研究者に取つては何たか内容がからつほてある様な感じがする。背景を那覇に取つてあるのでいくらかローカルカラーが現はれてゐる、けれども山城君は琉球人に特有なる鋭敏なる感覚を持つてゐないと見へて視覚に映するもの以外に自然を通じて自己の感情を現すことを忘れてゐる例へばあらしのあとて吾々の心理状態は何うてあらう？又吾々の嗅覚は一種異なる臭気を嗅くことは出来ないたらうか

〈ローカル・カラー〉は一応認めつつも、視覚に呼応すべき「鋭敏な感情」や〈思想〉の不在をつき、同県人がとらえたものとしては「内容がからつほ」だとするのだ。さらに「作者が心を籠め思ひをひそめて筆をとるに当りては、その材料の何物たるに論なく、ことごとくその人の思想、感情、想像の熔炉を通過しなくてはならない即ちその片言雙語もことごとくその人の心血の一部と其人の内部生活の餘瀝でなくてはならない」と指摘を続ける。つまり表層的な描写からでさえ発見されうる地方性とは別の次元を求めていることが分かる。〈ローカル〉なものとは「本当の人物、本当の時代」を示すものであり、それは沖

繩人だから沖繩を〈書ける〉というのではなく、内的な部分と通底したものでなければならぬ。その不在が月城の「九年母」への不満だといえるだろう。

四、「琉球語」と散文

月城は本間正雄の「琉球語がざらに出て来るので頗る読み辛かつた」との評価を受けて、正忠の使う琉球語がブローケンなものだと指摘し、散文においては琉球語の使用がなくても風俗は写せるとして「完全な日本語」による作品化を求めている。「殊に韻文学は母国語でなくては人を動かすことは出来ない」としながらスコットランドの詩人バーンズ、アイルランドの詩人トマス・ムーアを例に挙げる。

詩集中でも愛蘭アイルランドといふ愛蘭の方言を使つて書いたものか殊に秀れてゐるのも共に自己の感情を■表するに一番都合がいい言葉を使用したからである、けれども散文は韻文程句調を重しなくて宜しい近頃の傾向は技巧の美よりも作の内容に重きを置くやうになつてゐるから吾等沖繩人にも小説が書けぬ理由ないと思ふ兎に角吾等沖繩青年は如何にして完全なる日本語を話す可きかを講究す可きである、けれども僕は国民教育の統一上さういうのではなくして芸術の爲めに——南日本を代表する芸術——の爲めにさういふのである

月城は言語の「国民教育の統一」とは別のところで「完全なる日本語」

を講究すべきだと言う。ここで希求される「完全なる日本語」は万人に通ずる文芸芸術を供給する手段として構想されているだろう。「完全なる日本語」とは、〈ローカル〉なものを〈中央〉に持ち込む手段でありながら、沖繩が「統一上」の日本に示されるのではなく、「南日本を代表する芸術」としての地域性を担保に、「完全なる日本語」による、〈差異〉という係争点の提示が仮構されているように思える。〈日本語〉という制度下におかれた不安定的で抑圧的な沖繩において、中央に係争点を示す手段が「完全なる日本語」の役割りであり、それをを用いて固有でローカルな政治的文化的差異（抵抗）を示すことが月城の散文小説に示される文芸観であり思想なのである。またそれは「琉球語」に依拠する琉歌とは違い、散文であるからこそ到達されるべきものであった。

正忠「九年母」では、「ブローケン」な琉球語の使用は会話文に限られており、それは以下の特徴を示している。琉球伝統でありながら、非文明的だとされる〈髪結〉を切ることを〈政一〉に勧める校長細川の言葉を受けて、〈政一〉は「イヤだ、言われてんすむさ、サイ」と述べ、父は「それぢや日本人ではあらんさや」と、わざと島のなまりを出していふのである。〈日本人ではない〉という否定的な言説を導く会話での「琉球語」使用に対して、本土の人間との会話には〈正しい日本語〉が用いられる。「ブローケン」な琉球語に月城が見出したのは、その不正確さ以上に、階層的にとらえられる〈日本／沖繩〉の関係ではなかつただろうか。

「完全なる日本語」Ⅱ「散文」と峻別し、「韻文」において「自己の

感情」表現に用いるべきなのが〈地方〉言語だという月城の思考は、例えばカフカが「イディッシュ語において認めるものは、ユダヤ人にとっての一種の言語的領域性よりも、むしろドイツ語を酷使する遊牧民的な非領域化の運動である」⁽⁴⁾との言説と呼応するように思える。イディッシュ語がカフカにとつて魅力的なのは「それが宗教的共同体の言語であるという点よりも、むしろそれが民衆劇の言語であるという点にある」との指摘は、月城が基層的文化風土に関する議論において「琉球民族が各自の立脚地を知」ることの重要性とそれの上での「精神的」な「復活」に向けた「琉球固有」への拘りと重なる。月城の正忠「九年母」批評の核には「琉球固有」の「立脚地」の不在への批判があるといえる。月城にとつて〈思想〉との関連において、「九年母」は真に沖繩の〈文芸復興〉に値する作品ではなかつた。それは「九年母」における女性の描かれ方からもうかがえる。普猷同様に月城も抑圧的な女性への視座を有していた。

あゝ、囚はれたる女性そが解放の日は何時ぞや予は歩き出した種々の感想が胸に浮んで来た、女性は男性の玩物になる為めに生れ来たのがあらうか何故に男子は自己は不貞操なるのに女性に貞操を強ひてゐるか有夫姦罰す可んは有婦姦も亦罰するの必要がないだらうか何故に男性は所謂墮落せる女性を排斥して居るに聞わらず遊女とふざけちらしてゐるか〔…〕⁽⁴⁶⁾

ここでは男性の有り方に疑義を呈しながら、男性中心の社会的なま

なぎしにさらされ一方的に拘束される女性の「解放の日」が夢想されている。これら社会改造のために、月城がこれまで論じてきたのは、実践的社會運動へとつながる〈目醒め〉であり、そのための文化的価値創造であった。しかし「九年母」に登場する、「人形のやうな色の白い、光沢のいゝ細面」をした〈人形お鶴¹⁷うし〉は、細川校長の囲われ者であり、「白いきやしやな指には島ではめつたに見たこともない、緑色の寶石をちりばめた黄金の指輪」をするほどの豪華な生活を送っていた。だが「校長が控訴されて長崎におくられた頃には、「人形お鶴」は再び遊女としてある様に」戻らざるを得なかった。抑圧的な環境において主体性を獲得することができず、またそのような〈行動〉にも踏み出せない。月城は、〈行動〉と内面の相関性を求め、それが〈革命的〉な「文学」の有り様と連関するところに、沖繩の〈文芸復興〉を見ようとしていた。その視座からすれば、女性の「解放」とはほど遠い作品として「九年母」は捉えられたのだろう。

正忠「九年母」は前述のように、日清戦争下の「頃は明治二十七年」を舞台にとっている。首里に駐屯する「熊本分遣隊」の兵隊は、日曜は「町の色街」で遊び「酔ッぱらつて」いる。住民は「ヤマトの野獣」といつて嫌悪するが、日清戦争の連勝報道や「戦争幻燈会」の〈教育〉¹⁷により、清に対して「おのづから敵愾心」が起きていた。月城は、この時代設定をどのように読んだのか。頑固党と開化党の対立は、日本の勝利により頑固党が後退することとなる。頑固党の象徴としてテクストに登場するのが〈奥島老人〉であるが、作品の最終盤、細川校長

に騙されたその末路はどうだろうか。

それと同時に、彼の奥島老人が、町の美少年を九年母でだましては私宅につれこみ、ムリヤリに支那思想を鼓吹する。そのうえ、あの年齢をして、あらうことか、あるまいことか、「若衆あそび」——男色——をやるといふ噂がたつた。／彼は朝敵だといって、みんなに憎まれた。ときく屋敷内に石が降るといふので、昼でも門を閉めてその姿をかくした。

月城は、老人が受けた仕打ちに対して、名前のない民衆による内省なき暴力の表出、また民衆の「浅薄なる国家主義」への追従をみたのかもしれない。戦争の勝利がもたらす〈日本化〉は、二者択一の一方ではない。日本の勝利によつて〈奥島老人〉に石を投げる民衆像からは、〈目醒め〉は見いだせなかつただろう。

月城は〈ローカル・カラー〉は認めつつも、そこに投影されるべき内面の不在を問うた。それは沖繩の風土を土台にした内面の自立、文化風土の個性性がどのように表出されるかという問題である。例えば月城はホイットマンを通して「花鳥風月」だけの詩歌を否定し、そこにより大きな思想を求め、また〈革命的〉である「文学」の登場も希求していた。月城の期待する「文学」とは沖繩の個性に根ざした自律のための〈革命的〉作品であつたのだ。しかし、「九年母」は二項対立的な頑固党の敗北と、本土による象徴的な搾取という物語を持ち込み、抵抗や反意、状況への疑義を表出する者は描かれない。ここには、自

然主義的に自らの少年期に見た故郷の〈事実〉の近似値を再現した正忠に対し、沖繩を解放や自立へと導くべき作品を求める月城との懸隔が見出せるかもしれない。

現実の社会に生成される時事問題を重ね合わせる中で〈思想〉を形成し、批評へと展開させる月城には、同年四月の「河上肇舌禍事件」も大きな障壁となっていただろう。四月に来島した当時京都大学助教授の河上は、請われて「河上法学士の講話」の会を開いた。だがそこで述べた「仮令い本県に忠君愛国の思想は薄弱なりとするも現に新人物を要する新時代に於いて余は本県人士の中より他日新時代を支配する偉大な豪傑の起らん」の発言が、『琉球新報』に批判された。「我等は沖繩県民にして日本帝国の地方民なり之を国民道義の絶対標準に照して及ばざるあり」とした河上への批判からは、「国家主義」が求める〈同化〉への追従と、その浸透の跡が見て取れる。一方、『沖繩毎日新聞』掲載、無記名「机上餘瀝」には「小主観にて小憤激、忠君愛国てふ小なる觀念に囚はれて却りて国家の根本真意を忘却したるものに非ずや」と記される。河上肇が〈異化〉することで見出そうとした個別性の擁護という文脈は、月城の『沖繩毎日新聞』には理解されたということになる。

「浅薄なる国家主義」、「同化」や無批判的な従属、そこからの〈目醒め〉を促す月城が、正忠「九年母」に期待したものは大きかっただろう。だが「九年母」は、月城の〈革命的〉という観点からは逸脱した作品というしかなかつたのであり、明治末年沖繩の社会文脈と重ねても〈目醒め〉た青年の登場は見出せなかつたのである。

五、おわりに

月城は正忠の「九年母」を通して、今後「如何なる道」が開けるかを読者に示していた。それは内面の発見であり、〈革命的〉「文学」作品の出現であつただろう。月城は「人の心血の一部と其人の内面生活の餘瀝」、つまり土地性に根ざした所から内部を見つめることを重視した。「九年母」批判の翌日の記事で、月城はニーチェを引用し、「汝の立てる処を掘れそこに泉あり」と述べ、「この泉を飲んで味つて新しき我を発見してこの出発点から文芸を研究」することが必要だと説いたのであつた。⁴⁰ 月城の言説は多岐にわたっている。その論点や、翻訳を含めて言及された外国文学からの考察が今後の課題となる。

【注記】

- (1) 『沖繩毎日新聞』は一九〇八年二月一日創刊とされるが、一九〇九年二月以降しか保存されていない。伊波月城や山城翠香、末吉麦門冬らが執筆した。
- (2) 比屋根照夫「月城伊波普成小論」(『近代日本と伊波普猷』三一書房、一九八一・四、二二九頁)
- (3) 仲程昌徳「外国文学受容とローカル・カラー——沖繩明治文壇における一問題」(『沖繩文化研究』一九八七・二)、同『伊波月城——琉球の文芸復興を夢みた情熱家』(リブポート、一九八八・五)
- (4) 前掲(2)書、二三四頁
- (5) その後、三高、東京帝国大学と進んだ普猷は言語学を学び、一九〇六年七月に帰郷し『琉球新報』で執筆を開始し、一九一一

- 年には『古琉球』（沖繩公論社、一九一・一二）を刊行する。
- (6) 一八九五年には児玉喜八を会長とする沖繩県私立教育会の機関誌『琉球教育』が創刊され、その第二号から新田義尊「沖繩は沖繩なり琉球にあらず」が掲載されていき、新田は「沖繩といへる忠貞無二の淑女」、「日本魂を磨き上げて、我が国体を失はざること」と主張した。鹿野政直はこのような時代状況をふまえ、「ストライキ事件は、ヤマト化のなかでの自己喪失への抵抗であった」（鹿野政直『沖繩の淵——伊波普猷とその時代』岩波書店、一九九三・三二〇頁）と指摘する。月城は、その様子を間近に見ているのである。
- (7) 前掲(2) 書、二二七頁
- (8) 「誓閑寺時代の回顧——以て入社の際に代ふ」（『沖繩毎日新聞』一九〇九・三・一九）
- (9) 仲程昌徳『伊波月城——琉球の文芸復興を夢みた情熱家』（リポート、一九八五・五、五一頁）
- (10) 伊波普成はいくつか別名を用いている。オモロにある「月しろは、さだけで」から〈月城〉を、「ゑ、け、かみぎや、かなまゝき」から〈金細射〉の別名をとったと思われる（仲程昌徳『伊波月城』五三〜五五頁参照）。また仲程昌徳は〈未央〉を普成の別名と見たが、崎原綾乃によると「月城研究会」では「この文章は月城ではないと判断し」、「新聞社に所属し、かつ首里在住となると、一番可能性が高いのは麦門冬」だとの可能性を示している（「末吉麦門冬と伊波月城」『アプ』二〇一六・六、三四頁）。
- (11) 鹿野政直『沖繩の淵——伊波普猷とその時代』（岩波書店、一九九三・三、四四〜四九頁参照）
- (12) 「多方多面」（『琉球新報』一九〇六・一〇・二七）
- (13) 「琉球の研究と伊波氏」（『琉球新報』一九〇六・一〇・三二）
- (14) 伊波普猷の思想はオモロ研究、言語研究、日琉同祖論、女性の主体化など多層的に展開されており、その全体像については、前掲鹿野『沖繩の淵』、金城正篤、高良倉吉『伊波普猷』（清水書院、一九七二・一二）、外間守善編『伊波普猷人と思想』（平凡社、一九七六・一二）、外間守善『伊波普猷論』（沖繩タイムス、一九七九・九）、伊佐眞一『伊波普猷批判序説』（影書房、二〇〇七・四）などが参考になる。
- (15) 「東京たより」（『琉球新報』一九〇九・五・二六）
- (16) 「伊波文学士の談」（『沖繩毎日新聞』一九〇九・六・二五）
- (17) 例えば三哲利幸は、普猷の「無雙絶倫」と「日琉同祖論」の関係性について、「琉球人は「天孫人種」の子孫であり、日本人と同祖であることはまちがいないのであるが、その歴史をみれば、中国の影響を受けていることは否定できない」点に見出している（「伊波普猷の「日琉同祖論」をめぐる——初期の思想形成と変化を追う試み（1）」『社会文化研究所紀要』二〇〇八・九、六一頁）。
- (18) 伊波普猷『古琉球』（沖繩公論社、一九一・一二、九九〜一〇三頁）
- (19) 伊波月城『嶽色潮色』（『沖繩毎日新聞』一九〇九・四・二）
- (20) 伊波月城『嶽色潮色』（『沖繩毎日新聞』一九〇九・五・二四）
- (21) 前掲(9) 書、参照
- (22) 伊波月城『嶽色潮声』（『沖繩毎日新聞』一九〇九・四・一九）

- (23) 矢野峰人「創始期の新体詩」(矢野峰人編『明治文学全集 明治詩人集一』筑摩書房、一九七二・二、三七八頁)
- (24) 矢野峰人「近代詩と訳詩」(中島健蔵・矢野峰人監修『近代詩の成立と展開——海外詩の影響を中心に』矢野書房、一九五六・一一)
- (25) ワーズワースに関しても漢那浪笛が訳詩を発表している(『琉球新報』一九〇八・七・二三)。すでに宮崎湖処子により一八九三年「ワルズワース」が民友社から、また国木田独歩が「不思議なる大自然」においてワーズワースについて言及している(『早稲田文学』一九一一・二)。
- (26) 菊池有希『『文学界』同人の「繩墨打破」的バイロン熱』(『聖学院大学論叢』二〇一三・一〇、二六四頁)
- (27) 月城「狂人言(二)」(『沖縄毎日新聞』一九〇九・八)
- (28) 正忠は連載された「醒余集」(一)〜(六)(『沖縄毎日新聞』一九一〇・九・二四〜一八、二〇)において、「いつ見ても悲しきものは琉球の屋根の瓦の赤き土色／琉球の夏■夜こそかなしけれ墓場の上の酒と逢引」など琉球沖縄をとりいれた和歌を展開している。
- (29) 池宮正治「琉球文学総論」(『琉球文学、沖縄の文学』(岩波講座日本文学史第15巻)岩波書店、一九九六・五、三四頁)
- (30) 岡本恵徳「明治以後の文学」(前掲(29)書、一七九頁)
- (31) 他に岡本恵徳は、「内容は、那覇で漆器の製造と販売を営む松田家に、遊女をひかして間借りして住んでいるK町小学校の「細川繁」という宮崎出身の教師が、日清戦争のさなか愛国思想を鼓吹しながら、かげでは、親清国派である「頑固党」の首領である「奥島老人」を欺いて、「支那へ軍用金を出させることにして、其金をばみんな自分が着服し」「詐偽取材の嫌疑で縛に就いた」経緯を描いたもので、当時、山之城一という鹿児島出身の教師が李鴻章の密使といつわり、頑固党の中心人物から多額の金銭を軍資金として詐取した「山之城事件」に取材したものだ」と紹介している(『沖縄県史』第6巻各論5 文化2、一九七五・二、二四七頁)。
- (32) 月旦子「六月の文藝(四)」(『時事新報』一九一一・六・九)
- (33) 生田蝶介「小説と戯曲(六月)」(『白樺』一九一一・七)
- (34) 扁舟生「机上書架——六月の雑誌」(『創作』一九一一・七)
- (35) 宮本和吉「六月の小説」(『ホトトギス』一九一一・七)
- (36) 当該「ホトトギス」の「消息」には「挿絵」についての言及がある。「本誌は昔より挿画なるものに独立したる美術的価値を認め、之を尊重し来り」として「さし画」と題し六月中旬頒発売可致候」とある。一九〇八年に仏国より帰朝した斎藤与里は「印象派並びに後期印象派の移植された時期」、「明治の絵画から現代の絵画への過渡期」(岡畏三郎「明治末期に於ける「新傾向」に就て」『美術研究』一九五一・三、一九頁)に注目された洋画家であるが、当該号に「挿絵程、筆者の生命と直接関係の、真の、気分を表現したものが外にありませうか」との寄稿をしている。このような状況の中、「九年母」掲載頁には、その内容と関係なく平福百穂の「新聞生活」、小川千穂「三島神社」「天龍川」の他、与里の「筭」「Magicien」が載せられており、後者(二二頁)には、黒人三人

- が描かれている。内容と無関係でありながら、「南国の色彩」豊かだとされる「九年母」の読者が、ここでの表象と作品内容とを媒介に〈沖繩〉をイメージした可能性も考えられる。実際、見開き右側二〇頁には視点人物〈政一〉の母の描写について「色の黒い母」との表現があり、左頁の〈挿絵〉との間に相関性を示している。
- (37) 木村毅「明治文学に現われたる自然美」(『明治文学展望』恒文社、一九八二・一、一八〇頁)
- (38) 「三人冗語」(『めざまし草』一八九六・四／『鷗外全集第二三巻』岩波書店、一九七三・九、四八八頁)
- (39) 田山花袋(「ローカル、カラー」『小説作法』博文館、一九〇九・六／『定本花袋全集』第二十六巻、臨川書店、一九九五・六、二七四頁、二七五頁)
- (40) 月城「放言録(四)」(『沖繩毎日新聞』一九〇九・八・二五)
- (41) 「昇曙夢氏よりの書信(続)」(『沖繩毎日新聞』一九〇九・三・一〇)
- (42) 月城「嶽色潮声」(『沖繩毎日新聞』一九〇九・七・二〇)
- (43) 月城「閑是非」(『沖繩毎日新聞』一九二一・六・二八)
- (44) G・ドゥルーズ／F・ガタリ(宇波彰／岩田行一訳)「マイナー文学とは何か」(『カフカー——マイナー文学のために』法政大学出版局、一九七八、七、四六頁)
- (45) 高良倉吉は「伊波の思想と行動は、また若い女性たちをもひきつけた。封建的な家族制度に拘束されていた女性たちは、みだりに男の人と口を聞くことは許されていなかったし、結婚も親兄弟が

決めるのが当然だとされていた。その女性たちに向かって伊波は、まず「何よりも先に迷信の牢獄から自らを解放」(『沖繩女性誌史』)しなければならぬと説いた。近代的個人としての自己を意識し、自由意志による恋愛や結婚を強調した」と指摘する(金城正篤、高良倉吉著『伊波普猷——沖繩史像とその思想』清水書院、一九七二・二二、四四〜四五頁)。

- (46) 伊波月城「天火水火」(『沖繩毎日新聞』一九〇九・六)
- (47) 拙稿「過渡期沖繩の〈教育〉をめぐる物語——山城正忠「九年母」論」(『日本文学誌要』二〇一七・七)を参考されたい。
- (48) 金細射「感想録」(『沖繩毎日新聞』一九〇九・四・九)
- (49) 「旅行者の本俣評」(『琉球新報』一九二一・四・五)
- (50) 月城「閑是非」(『沖繩毎日新聞』一九二一・六・二九)、このニーチェの言葉は普猷、山城翠香らも度々使用している。
- ◆資料中、判読不可能な文字は■で示した。

正誤表

頁	13 頁
正誤箇所	英文タイトル
誤	One side literature around Okinawa of the Meiji era latter period : From point of view of the criticism to Seichu Yamashiro "Kunibu" by Getsujo Iha
正	One side literature around Okinawa of the Meiji era latter period : From point of view of the criticism to Seichu Yamashiro "Kunenbo" by Getsujo Iha

※正誤表は 2024 年 11 月 29 日追加されました。